

台湾・天主教輔仁大学の院生、小林亜咲さんの碩士論文（修士論文）の最終章のみ抜粋して、掲載させていただきます。

# 「瀬戸内晴美初期作品における中国

## ——生と性からみる作家の原点——より

小林 亜咲

### 終章

#### 第一節 結論 ——瀬戸内晴美の原点——

本節では、第一章から第三章までの内容をまとめ、そこから瀬戸内晴美の原点を考察したい。

第一章で扱った1957年に発表された「花芯」は、「必要以上に「子宮」という言葉がつかわれている。……（中略）……三十娘の生理を描いた近作には、明らかにマス・コミのセンセーショナルリズムに対する追隨が読み取れた。これがこの作家の弱さだ。そのような弱さが『花芯』においても「子宮」と

いう言葉の乱用となつてあらわれている。」と酷評され、瀬戸内はその後5年間、文壇から干されることとなった。「マス・コミのセンセーショナルリズムに対する追隨」や、「子宮」という言葉の乱用」と指摘されたわけだが、細かく作品を読んでいくと、そこに描かれているのは、女の精神性と肉体性の相剋、そしてその先にある哀しみなのである。田村俊子など同テーマに取り組んだ先行作家はいるが、瀬戸内はこうした問題意識を引き継ぎながら、女特有の「子宮」を通して、性愛における女の感情の変化を詳しく書いた。そのためか、スキャンダラスな描写のみ注目され、「子宮作家」などとレッテルを貼られるこ

とになった。しかし、それはマスコミに媚びているのではなく、むしろ読者を無視して、瀬戸内が自分で描きたいものと向き合った証拠であろう。これは「この作家の弱さ」なのではなく、当時、どの女性作家も書き得なかった女の性を正直に綴った瀬戸内の「強さ」なのである。

第二章では、北京が舞台のレズビアン要素を含む作品「吐蕃王妃記」、「女子大生・曲愛玲」について見てきた。「吐蕃王妃記」で描かれているレズビアン要素は、歴代の作家たち、例えば吉屋信子、川端康成、宮本百合子といった作家たちが描いてきた女学生同士の友情「エス」の風習である。瀬戸内もエッセイなどで、学生時代の「エス」の風習に触れているが、その感情は「一種の模擬恋愛」だとしている。しかしながらその後には書かれる「女子大生・曲愛玲」では、金や権力を求めた女学生の「娼婦性」故のレズビアン要素で、「吐蕃王妃記」で描かれている感情とは全く異なるものである。

本章では女学生の「娼婦性」に注目し、同世代の張愛玲の作品と比較したが、二人の直接的な関係を見出すことはできなかった。しかし、自分の求めたものを手に入れるために「娼婦性」を獲得していく過程には共通性がある。そして、なぜ瀬戸内は、中国人女学生に「レズビアン要素」と「娼婦性」を持た

せるのか。それは近づくことすれば離れていく、瀬戸内にとつての中国を表象しているのではないか。そして、その中国の特徴として「同性愛」や「娼婦性」があり、作中で侵略国であるヒロインは中国人女学生からその要素を感じ取っている。同じテーマは吉行エイスケの上海を描く作品にも先行して見られることを本論でも触れたが、「同性愛」や「娼婦性」という要素は、瀬戸内にとつての、中国の女性性を構成していると言えるのだ。

第三章では、処女作「痛い靴」、評価された「夏の終り」、その原型とされる「ざくろ」の三作品を対象とし、瀬戸内が初期作品で描いたその「女」と「男」の特徴から、瀬戸内の死生観の考察を試みた。これらの作品を詳しく見ていくと、瀬戸内の描く女たちは、一見男に振り回されているように見えるが、その関係の中で主導権を握っているのは女の方であり、彼女たちは男にとって「精神的娼婦」である。男はというと、「死の匂い」を纏っており、ヒロインは彼らの死を想起したとき、より一層彼らに執着する。なぜ、ヒロインは「死」を想起させる男に惹かれるのか、それは瀬戸内自身が「死」に惹かれているからである。戦争の影響で「死」を恐れておらず、むしろ自分で自分の命を絶つという行為は瀬戸内にとって、羨望と感嘆の対象なのである。男女間でその「死」を意識することでより愛

を深めることは、その瀬戸内の死生観が強く影響していると言えるだろう。

以上が本論第一章から第三章の概括だが、以下でそれぞれの作品の「死」を想起させる描写について整理したい。「死生観」に注目して、他の作品（「吐蕃王妃記」「女子大生・曲愛玲」「花芯」）を見ていくと、処女作「痛い靴」から「夏の終り」にかけて、作品における「死」の色が濃くなっていくのは明らかである。

はじめに、「吐蕃王妃記」と「女子大生・曲愛玲」の場合を見ていくが、この二つの作品における「死」の描写は、「花芯」や「夏の終り」と比べると多くはない。例えば、「吐蕃王妃記」では、劉淑春が老人と上海に行く前に、藤江貴司を訪ねているところを見た「わたし」が「あのふたりは、死の相談をしていたのではなかっただろうか。」（p:291）と疑問に思う場面が出てきたり、「女子大生・曲愛玲」では、物語はじめて、山村みねと、曲愛玲は、「みねの腕の中に、曲愛玲が青ざめて目を閉じ、ぐったりと気を失ったように、倒れかかっていた。」（p:138）という様子で「わたし」の家に押し寄せる。「愛玲はね、私に内緒で、支那人の変な医者にかかって大変だったの。出血がひどくって、死ぬんじゃないかと、昨夜から一睡も

してないわ。」（p:140）といったように、「死」は最初の曲愛玲の状態を形容するものとしてのみ出てくる。

次に「花芯」について見ていく。園子が越智に恋したことを雨宮に伝え、雨宮は園子と息子を連れ東京へ引っ越すことにした。その前に最後に越智に会った園子は、「この一瞬に、ポンペイ爆発のような天変地異がふりかかることを、私は希ったくらいだった。」と述べており、越智とのこの時間を「死」という選択をすることで永遠に続いて欲しいと願っている。しかし、「娼婦」となった園子は、下記のように述べる。

ただ一度しかあわぬ行きずりの男と、何もかも忘れて没頭し、あの甘美な「死」の中をくぐって甦る、瞬間のいのちの充実を実感したいのだ。その時を——。

あの老人が予言したような、私のほろびの日は、案外、明日の日かもしれない。死というものを。私はセックスの極におとずれる、あの精神の断絶の実感でしか想像することできないのだ。

「死」を意識することで、「いのちの充実」つまり「生」を感じ

じるのである。そして、その「死」は肉体関係を通じてしか感じるができないのである。

ここで、1955年「痛い靴」から1962年「夏の終り」の中に描かれる「死の匂い」の濃さを年代順に整理する。1955年「痛い靴」は、男が衰えていく様子にヒロインは惹かれていた。1955年「ぎくろ」では、男との時間が「死」という選択をすることで永遠に続いて欲しいとヒロインは感じたり、男が一人で死んでしまうことを恐れている。1956年「吐蕃王妃記」では、中国人女学生と日本人の男教授が二人で死を計画しているのではないかとヒロインは気にする。1957年「女子大生・曲愛玲」では、最初に堕胎手術を終え瀕死の「娼婦性」を持った曲愛玲が登場する。そして、1958年「花芯」のヒロインは、「娼婦性」を獲得していく過程において、肉体関係を通して、「死」を意識することで、「生」を感じることができる。1962年「夏の終り」では、「精神的娼婦」であるヒロインは、「死の匂い」を纏った男に惹かれ、さらには、彼らの「死」を意識することでより愛を深めていく。まとめると、「痛い靴」ではほとんど「死」の描写はなく、「ぎくろ」「吐蕃王妃記」では、女と男がずっと一緒にいる方法として、「死」が登場している。しかし、「女子大生・曲愛玲」か

らは「娼婦性」と「死」が連動するようになり、「花芯」からは「死」を想起させる描写が多くなる。先述したように、処女作「痛い靴」から「夏の終り」にかけて、作品における「死」の色は濃くなっていくのである。

「死」を想起させる描写が増え、それが「娼婦性」を持つヒロインに集中し始めたのは、北京生活のことを描いた「女子大生・曲愛玲」である。そして、瀬戸内の死生観を決定的にしたものとして戦争があり、瀬戸内の初期作品において、「娼婦性」と「死」は欠かせないキーワードである。つまり、彼女の原点は、中国での戦争なのではないだろうか。瀬戸内が80歳の時に中国の古都（北京、紹興、天台山、上海）を訪れ、これまでの生涯を振り返る作品198を出版している。その本の帯には大きく「私の人生の原点は中国にある」と書かれており、中には中国での生活や、当時どれほど友好的な気持ちでいても、結局は「侵略国の一員」として滞在するしかなかったことへの忤怛たる気持ちが続られている。そのような瀬戸内の初期作品に描かれる中国は、本論で見てきたように女性性を有しており、その女性性は「同性愛」と「娼婦性」で構成されているのである。最後に、女性作家が女の性について書くこと、について考えたい。「花芯」では、読者を意識して書いたものではないが、「花

芯」の中のヒロインはまだ、女優、いわば演じているもので、自分とは別の女性になりきることを書くことができた。その5年後に発表した「夏の終り」は、「出来の結果など、私に考えられなかった」（電子版No.7850／8845）199という言葉から分かるようにこの作品も読者を意識して書かれたものではない。

加えて、瀬戸内は「夏の終り」の執筆時について、次のように語っている。

彼との八年間に深いうらみや後悔や、かくされていた嫉妬や、憎悪や、待つことの切なさや、愛の不如意が、私の気づかぬ私の内部からえぐり出され、書かれることがあるとすれば、それは小説という別個の私の創作の世界の中でこそ、リアリティをもつて定着づけられるものではないだろうか。（p.92）200

田村俊子が化粧という行為によって、女の性について書くことができたのなら、瀬戸内は小説という世界だからこと、書くことが出来たと言えることができる。そして、私小説とはいえない、その世界はあくまで瀬戸内の「創作の世界」なのである。

瀬戸内にとって、「書くこと」こそが女の性と向き合うことのできる唯一の手段であり、「夏の終り」ではヒロインが演じることなしに、女の性について書かれている。それは瀬戸内が小説というフィクションと向き合った結果であろう。こうした格闘の末、瀬戸内は正面から女の性について書いた初めての女性作家となったのである。

## 第二節 今後の課題

本論文は、瀬戸内晴美の初期作品から、彼女の小説家としての原点を明らかにすることを試みた。今後の課題では、今回扱えなかった評伝『田村俊子』（1959）などで「中国」がどのように描かれているのか分析したい。本論で述べたように田村俊子は1945年上海で客死しており、そのような女性作家の生涯を瀬戸内が描くことで、そこには瀬戸内の原点である「中国」や「生と性」の問題が投影されていると考えられる。

加えて、瀬戸内を語る上で出家や仏教は切り離せないものである。1973年瀬戸内が51歳の時に、平泉中尊寺にて得度している。瀬戸内は出家した当時を振り返り、「出家してなければ、自殺していただろう」（p.331）201、また、「出家

とは生きながら死ぬことよ」(p・332)202と述べている。

瀬戸内は出家前、井上光晴<sup>203</sup> (1926—1992)と付き合っていたが、井上は自らの出身地をしばしば「旅順」であると語り、そこを作家としての原点としていた<sup>204</sup>。本論で考察したように、瀬戸内の「原点」も中国での戦争という体験があり、その意味からも瀬戸内は井上に強く惹かれたのかもれない。

当時の状況を井上光晴の娘、井上荒野<sup>205</sup> (1961—)が2019年に『あちらにいる鬼』<sup>206</sup>という作品中で語っている。この作品は瀬戸内に取材をしながら書かれた作品である<sup>207</sup>。瀬戸内を連想させる長内みはるという女と、井上を連想させる白木篤郎という男が出てくるが、作中で白木篤郎との関係に疲れ始めた長内みはるは、次のように述べる。

もちろんわたしは衰えていく。でも、体が衰えても、心はしぶとい。むしろ体が衰えるほどに、ところが求めるものは切実になっていくだろう。さらに老いて、もう性交ができなくなっても、こんなことは続くだろう。なぜならわたしという人間には、それが必要だから。出会ってしまい、魂が動かされれば、そのことに気づかないふりをする

はできない。気づかないふりをしながらゆるゆる生きるなんて耐えられない。だからこんなことは死ぬまで続くのだろう。(p・137)

長内みはるは自分の性格を上記のように分析し、満たされることのない人生を悟る。

さらに、長内みはるは白木篤郎への感情が大きくなればなるほど「自殺」を意識するようになる。まとめると、長内みはるは、自分からは離れることのできない「いとおしい」(p・148)白木篤郎(井上)と、一生満たされることのない人生との別れとして「自殺」を考える。しかし、ここで「出家とは生きながら死ぬことだ」という瀬戸内の言葉を考えると、当時の瀬戸内にとって出家とは自分が生き抜くための選択であったのではないだろうか。

また、『あちらにいる鬼』は2022年に映画化されている。瀬戸内自身も出演している、井上光晴の晩年の5年間を追ったドキュメンタリー「全身小説家」が、映画「あちらにいる鬼」とやはり重なることが多い。映画「あちらにいる鬼」では、長内みはるは「出家とは生きながら死ぬことでしょ」と言うが、このセリフは原作には出てこない。これを入れたのは、限られ

た時間の中で一連の長内みはる（瀬戸内）の葛藤を表すためだろう。

現時点では筆者は瀬戸内の出家について上記のように考察している。また、瀬戸内が現代語訳した『源氏物語』2008では、光源氏との恋愛の末7割方の女性が出家している。瀬戸内は、彼女たちがなぜ出家したのかについて、「愛されると同時に、愛されたがために、それまで知らなかった苦しみを伴」209、また自身の出家体験と重ねて、出家すると「女の心の丈」が高くなると指摘している。これらのことを踏まえ、今後は、『源氏物語』をはじめ、彼女の作品から出家や仏教について読み取り、詳しく分析していきたい。

こうした作業を通じ、瀬戸内の「原点・中国」、そして「性と性」の意味も、より深く論じていけるのではないか。

#### 注・参考文献等

- 198 瀬戸内寂聴（2003）『寂聴中国再訪』日本放送出版協会  
199 瀬戸内寂聴（1974）『いずこより』新潮文庫  
200 瀬戸内寂聴（1998）『晴美と寂聴のすべて』集英社  
201 瀬戸内寂聴（2003）『場所』新潮文庫  
202 同注199

203 井上光晴…

昭和後期―平成時代の小説家。中国旅順生まれ。長崎県の炭鉱ではたらく。戦後、共産党にはいり「書かれざる一章」を発表するが、反党的と批判され離党。1970年季刊誌「辺境」を個人編集。社会の底辺にある差別、矛盾を追及しつつけた。『日本人名大辞典』

204 <https://japanknowledge-com.eu.proxy.openathens.net/lib/display/?id=5011061851180>（2024年6月5日閲覧）  
井上光晴のドキュメンタリー映画である原一男監督「全身小説家」（1994）で井上はしばしば「旅順出身」であると語る。だがそれはフィクションであるらしいことが映画中で明かされている。

205 井上荒野…

平成時代の小説家。井上光晴の長女。1989年「わたしのヌレエフ」でフェミナ賞。2004年「潤」で島清恋愛文学賞。2008年宿命の出会いに揺れる女と男をえがいた恋愛小説「切羽へ」で直木賞。2011年「そこへ行くな」で中央公論文芸賞。

『日本人名大辞典』

<https://japanknowledge-com.eu.proxy.openathens.net/lib/display/?id=5011088174140>（2024年6月5日閲覧）

206 井上荒野（2019）『あちらにいる鬼』朝日新聞出版

207 「婦人公論」：瀬戸内寂聴×井上荒野 私と母がいながら、寂聴さんと7年も男女の関係を持っていた父・光晴。一度は絶対

嫌だと断った二人についての小説を私が書こうと決めた理由」  
<https://fujinkoron.jp/articles/-/7085> (2024年6月5日  
閲覧)

208 紫式部(著) 瀬戸内寂聴(訳) (1998) 『源氏物語』 講談  
社

209 インタビュー 瀬戸内寂聴さんに聴く 源氏物語、そして幻の  
一帖「藤壺」

[https://www.yurin.do.co.jp/static/yurin/back/yurin\\_444/  
yurin3.html](https://www.yurin.do.co.jp/static/yurin/back/yurin_444/yurin3.html) (2024年6月17日閲覧)